

北海道機船漁業地域プロジェクト・小樽(沖合底びき網漁業)

(新世丸160トン、第八十一桂丸 160トン、第五十七丸中丸 160トン、第八十五日東丸 160トン)

もうかる漁業創設支援事業検証結果報告書(経営多角化)

事業実施者:小樽機船漁業協同組合

実施期間:平成27年4月 1日～平成30年3月 31日(3年間)

1. 事業の概要

小樽地区の基幹産業のひとつである沖合底びき網漁業の経営の安定的継続を図るため、本事業においては、水揚げ金をプール化することを通じ、船主と漁労長等で構成される操業対策委員会を設置し、当該委員会の指揮の基、スケトウダラTAC管理の徹底を図り、漁場探索等操業の効率化を行い、生産コストの削減を図り、合わせてホッケの生鮮加工向け製品の増産等により、品質向上に基づく販売単価向上を図り、収益性を回復することで、資源管理に伴う他魚種転換等の経営多角化を図る実証事業を行った。

2. 実証項目

【生産に関する事項】

資源管理に関する事項

- A スケトウダラTACについて、配分数量が大幅に削減され、管理体制の更なる強化が求められたことから、新たに小樽機船シーパワー有限責任事業組合(LLP)を立ち上げ、操業対策委員会において、小樽地区に配分されたスケトウダラTACの管理強化する。また、ホッケの自主管理規制についても、継続する。

操業等の合理化に関する事項

- B シーパワーLLPの指揮命令による漁場選択、配船により航行距離短縮、氷積込み数量制限、燃油消費量を削減しコスト削減を図る。
- C 現行3件ある網工場を1工場に集約し、人件費等の関連経費の削減を図る。
- D 予備ロープ、予備網等持ち網を共有化し、経費の削減を図る。
- E 荷揚げ作業の共同化による経費削減を図る。
- F アイスキャッチャー(砕氷撒機)の導入及び操業・陸揚げ作業の配置見直しによる人件費削減。
- G 回収可能なリサイクルボックスの導入による箱代の削減。

3. 実証結果

スケトウダラTACについては、1年目割当量1,650トン、消化量1,642トン、2年目割当量1,850トン、消化量1,848トン、3年目割当量1,550トン、消化量1,549トンという結果で、TAC内の消化となった。ホッケの自主管理規制については、目標471隻日に対し、1年目204隻日、2年目111隻日、3年目112隻日となり、自主管理規制内であった。

1隻当たりの年間燃油消費量は、1年目450kℓ、2年目410kℓ、3年目357kℓで、いずれの年も目標値559kℓを下回った。また、1隻当たりの年間氷消費量は1年目388トン、2年目410トン、3年目321トンで、いずれの年も目標値456トンを下回り、経費削減を達成した。

1隻あたりの経費額は、1年目1,993千円、2年目2,053千円、3年目1,801千円で、いずれの年も目標2,270千円を下回り、経費削減を達成した。

1隻当たりの修繕用資材費は、1年目2,305千円、2年目2,863千円、3年目1,392千円で、いずれの年も目標3,100千円を下回り、経費削減を達成した。

1隻当たりの荷揚げ運賃は、1年目2,837千円、2年目2,898千円、3年目3,300千円で、いずれの年も目標3,825千円を下回り、経費削減を達成した。

アイスキャッチャーの導入と配置見直しにより乗組員1名を削減し、15名体制での操業が出来ることを確認した。しかし、用船料算定における人件費が、平成26年の近年では比較的水揚げが良好であった年を基に算定したことにより人件費の削減には至らなかった。

リサイクルボックスは年間30,000箱を生産する目標であったが、1年目6,049箱、2年目4,650箱、3年目5,242箱で終わった。これは、ホッケの魚体が良い時期(低水温期)にリサイクルボックスを用いて高鮮度を保持し魚価を向上させ、それに伴い木箱を減らす試みであったが、ホッケの漁獲量が極端に減少したことから目標の生産数量には至らなかった。

2. 実証項目

高付加価値化に関する事項

H ① 漁獲量が減少するホッケについて、箱詰め割合を増加することで、すり身原料向けから加工原料向けへの転換を図る。

H ② 操業終盤で漁獲された大中サイズのホッケを船内に設置した1トンコンテナで冷却し、発泡下氷の3～5kg詰め製品を生産し単価の向上を図る。また、併せて大タコの活魚販売向けの生産をする

H ③ 落し身業者、選別冷凍事業者向けに操業終盤で漁獲された中小ホッケの一部を帰港時に速やかに陸上に用意された保冷コンテナで冷却し販売することで魚価の向上を図る。

【流通、販売等に関する事項】

商品開発・販路の開発・拡大に関する事項

H ④ 「シーネット小樽機船LLP」の強化と「小樽機船シーパワーLLP」との連携強化により、ホッケの商品開発を図る。

H ⑤ 「シーネット小樽機船LLP」において、カレイ、ワラズカ等の商品開発を図る。

H ⑥ 低利用魚種(ソウハチ、ウロコメ、ハツメ等)を「シーネット小樽機船LLP」や輸出関連業者との連携により国内外への冷凍製品の販路拡大を図る。

地域との連携に関する事項

I 小樽地区にある流通、加工、販売等の業者が参画する各種団体との連携を図り、漁獲物の付加価値向上と魚価形成の安定化を図る。

3. 実証結果

生産目標及び生産金額は、1年目29,220箱、132,972千円、2年目22,530箱、63,930千円、3年目9,881箱、29,898千円で、各年とも目標値(1年目32,000箱、66,560千円、2年目35,000箱、72,800千円、3年目38,000箱、79,040千円)を下回った。生産量が目標を下回ったのはホッケの漁獲量が大幅に減少したことによる。

他方、魚価は1年目284円/kg、2年目189円/kg、3年目202円/kgと、目標130円/kgを上回った。

年間の生産量は1年目110ケース、2年目606ケース、3年目725ケースで、目標値(1,500ケース)を下回った。ホッケの漁獲量が大幅に減少したことによる。単価は1年目373円/kg、2年目442円/kg、3年目304円/kg、3年平均357円/kgで、目標値(350円/kg)を上回った。

タコの年間数量と単価は、1年目179kg、380円/kg、2年目284kg、315円/kg、3年目255kg、351円/kgで、目標値(4,000kg、500円/kg)を下回った。これは、漁獲時の生存率が低く数量も少なかったことから需要が伸びず単価も向上しなかったことによる。

単価及び生産量は1年目292円/kg、8,822kg、2年目119円/kg、19,270kg、3年目120円/kg、6,815kgであった。生産量はホッケの漁獲量が大幅に減少したことにより目標値(40トン)を大きく下回ったが、単価は目標値(58円/kg)を大幅に上回った。

シーネット小樽機船の構成員が箱詰めホッケ製品を買付けて販売を強化をした結果、目標(130円/kg)を上回る単価(1年目303円/kg、2年目214円/kg、3年目207円/kg)で販売ができ、販路の開発等が進捗した。

1年目にはソウハチのすり身製品、2年目にはソウハチの量販店向けにフライ・竜田揚げ用製品、3年目にはワラズカの味付け揚げ物製品開発を行った。

1年目ソウハチ、ハツメを81,348kg、単価40.8円/kgで、2年目は小型冷凍ソウハチを国内外に385トン、71円/kgで、3年目は小型冷凍ソウハチを国内外合わせて170トン、50.8円/kgで販売した。1年目は数量が目標を下回ったが、2年目及び3年目は数量・単価とも目標(約50トン、30円/kg)を大きく上回った。

1年目及び2年目は、小樽物流推進検討会において高級魚を中心に留め置き実証試験を実施した。3年目は、「小樽市健康づくり推進ネットワーク」、小樽水産加工品ブランド委員会、小樽物流推進検討会議及び食クラスター会議にも参加し、新製品の販路拡大に努めた。

4. 収支、経費、償却前利益及びその計画との差異・その理由

【収入】

3年間の平均水揚量(1,552トン)は、改革計画(3,568トン)を大きく下回り、計画数量の43%となった。これは、ホッケの漁獲量が大幅に減少したこと、また、ホッケ等の資源的な問題もあるが、近年、北海道を大型低気圧が頻繁に通過し時化が続き出漁日数が計画(138日)に対し、大幅に減少したことによる(1年目96日、2年目86日、3年目73日)。

また、3年間の平均水揚金額(平均244,278千円)は、1年目及び2年目はスケトウダラ、ホッケ等の魚価の向上もあり改革計画の93%であったが、3年目はホッケの漁獲量が更に減少したことから計画68%となった。

魚価は計画時79.5円/kgに対し、1年目190.2円/kg、2年目140.6円/kg、3年目147.6円/kgと、計画を大きく上回った。

【経費】

燃油代は、計画53,100千円に対し3年間ともに約半減となった。修繕費は、資材の高騰や、トロールウィンチ周辺及び油圧配管の劣化等による修繕及び定期検査時における検査対応の修繕により増加した。

【償却前利益】

3年目事業の終了時点における、平均償却前利益は△32,916千円であり、計画値12,708千円を大幅に下回った。ホッケの漁獲量が計画を大きく下回った結果により、水揚量、水揚金額が大幅に減少したことによる。

5. 次世代船建造の見通し

操業等の合理化に関する取組においては、人件費、燃油消費量及び氷消費量の削減がそれぞれ目標通り達成された。また、ホッケに関する高付加価値化に関する取組においても、ほぼ目標とする魚価向上が達成された。このことから、収益性回復の効果への期待がもたれるが、ホッケの道北系群の予想を上回る資源悪化により、ホッケの漁獲量が大幅に減少し水揚額が目標を大きく下回り、償却前利益を確保することができなかった。

6. 特記事項

大幅に削減されたスケトウダラTACにより脱スケトウダラ依存による漁業経営を構築することで収益性の確保をすることを目標に事業を展開したが、スケトウダラTAC管理については、操業対策委員会等の活用で管理体制が構築された。従来、すり身加工向けとしていたホッケ資源については、すり身以外の加工原料向けへの転換を図ってきたが、ホッケの漁獲量が予想を大きく下回り、転換が思うように進展せず、すり身加工場が閉鎖する事態も発生した。

事業実施者：小樽機船漁業協同組合(TEL:0134-34-1222)

(第72回中央協議会で確認された。)